

第14回「泉大津オリアム随筆賞」

【泉大津市長賞】

目と目をつなぐように

喜多 泰友記・大阪府泉大津市

夜遅くまで部屋に響いていた、糸を通す小さな針の音。カチカチと微かな金属音とともに、作業机に向かう両親の背中が、いつも変わらなかった。

僕の両親は、リンキング作業、家族間では「リンキン」と呼んでいる繊維業務に携わっている。セーターやニット製品のパーツ同士をつなぎ合わせる、最後の重要な工程だ。表からは見えない地道な作業だが、そこが甘ければどんな高級なニットでも着心地が損なわれてしまう。袖と身頃を、襟と胴体を、目と目を正確につなげていく。わずかでもズレれば、全体が歪む。何千、何万と続く編み目を数え、正確に針を入れるその手作業は、根気と集中力を要するものだ。そんな仕事を、両親は共に、日付が変わる頃まで毎日続けた。僕と妹は、そんな家庭で育った。

「夕飯、先に食べてていいからね」

作業場からそう声がかかるのが、日常だった。手を休める暇もなく働く両親を、子ども心に「すごいな」と思いながらも、どこか寂しくも感じていた。友達の家はもっと賑やかで、夕飯後には家族揃ってテレビを見たりしていた。でもうちでは、リンキング機の前で黙々と作業を続ける両親の姿が何より日常的だった。

それでも、僕たち兄妹は不自由なく育った。学用品も、給食費用も、滞ることはなかった。親戚づきあいや、季節の行事も最低限はこなし、冬には手編みのマフラーを持たせてくれた。派手ではないけれど、いつもちゃんと「満たされている」と感じられる家庭だった。

高校の卒業式の夜、母がぽつりと言った。

「あなたたちをちゃんとここまで育てられて、本当によかった」

その言葉を聞いたとき、僕の中で何かがほどけるような感覚がした。

——ああ、この人たちは、ただリンキンの仕事をしていたんじゃない。毎日、見えないところを支え、丁寧に目を拾い、家庭という一着を作り上げてくれていたんだなあ、と。リンキング作業は、見た目にはわからない。でも、そこが一番大切だ。継ぎ目がなめらかでなければ、着たときに違和感がある。縫い目を見せないように、自然な形でつなぎ合わせる。それはまるで、子どもの心と心を縫い合わせるような作業だ。僕たちの反抗期も、わがまま、沈黙も、両親は余計な言葉を挟まず、淡々と受け止めてくれた。その静かな包

容力は、まさにリンキングの職人としての「誠実さ」そのものだったと思う。

妹が専門学校を卒業したとき、父が少し照れながら言った。

「これでやっと、一区切りかな」

それは、二十年近くかけて一着のニットを編み上げたような達成感だったのだろう。表に見えないところまで気を配り、何千何万という「目」を拾い続け、ようやく仕上げた家族の形。

僕は今、両親のように手を動かす仕事には就いていない。リンキングという仕事の技術も知らない。だけど、両親の背中から学んだものがある。それは、どんなに目立たなくても、人の人生を丁寧につなぐということ。声を荒げずとも、誰かを支える力。少しずつ積み重ね、ほつれたらやり直し、時間をかけて仕上げていく姿勢。

最近、久しぶりに実家に帰ったとき、母がまだリンキング機に向かっていた。老眼鏡をかけて、ひと針ひと針、丁寧に編み目を拾っていた。その背中を見た瞬間、胸が熱くなった。

「ありがとう」ようやく、そう言えるようになった。

お父さん、お母さん。あなたたちがつないでくれた目と目の延長に、今の僕たちがあります。その手で紡がれた家族の温もりを、ずっと大切にします。